

32

伊藤隼三研究 (1) 鳥取市における少年時代および晩年の事跡

竹内 薫

鳥取赤十字病院産婦人科

同郷の先輩医師を顕彰する目的で、外科医伊藤隼三博士の生涯と功績を調査した。

伊藤隼三博士の略歴：元治元年5月9日、鳥取藩士小林辰蔵の三男として、鳥取市御弓町にて出生。明治7年鳥取中学入学。同11年、鳥取変則中学を4年で退学し、東京大学予備門に入学。同12年、医師伊藤健蔵の養子となり改姓。大阪専門学校、東京本郷臺町独逸学校を経て、同14年、東京大学医学部予科入学。同17年、東京大学医学部入学。同22年、東京帝国大学医科大学卒業。直ちに母校の助手に就任。同24年、依願退職し帰郷、私立伊藤病院院長に就任。欧州への私費留学を志して、同26年、県立鳥取病院米子支院長、同27年、北海道立札幌病院院長に就任。同29年11月15日から同32年12月6日まで欧州へ私費留学（ドイツのフライブルク大学およびベルリン大学にて医学一般の講習後、スイスのベルン大学で著名な外科医であるコッヘル教授に師事して外科学を専攻。その後、イギリス、ロシア、フランス、スペイン、イタリア、オーストリア、アメリカの諸大学の病院外科部を巡歴し、帰朝）。同33年、医学博士の学位授与。同年7月14日付で京都帝国大学医科大学教授（外科学第二講座担当）に就任。同34年、同大学附属医院院長、大正4年、同大学医科大学長に就任。同7年、帝国学士院会員。同13年、定年制にて京都帝国大学教授を退官。従三位勲二等を授与された。帰郷し、私立伊藤病院長として診療に従事。昭和4年5月14日薨去。

鳥取市における伊藤博士の事跡：出生地の鳥取市御弓町の町名は残存しているが、生家跡の位置は確定できなかった。旧姓である小林家の詳細や子孫についても不明。在学した鳥取変則中学は県立鳥取西高等学校の前身であり、鳥取城跡に存続している。残された資料によれば、「明治7年12月19日、今般試験ノ節学業優等ニ付左ノ通賞與候事 一、英習字本式冊」、「明治10年11月、従来学業篤志當春大試験ヨリ秋分大試験マデー日モ無懈怠勉勵殊ニ昇級候ニ付キ墨汁壺壘洋紙六帖賞與候事」、「同10年12月17日、舎長申付候事」など賞与が多く、秀才であったことがわかる。私立伊藤病院は養父である医師の伊藤健蔵氏が、明治24年鳥取市本町一丁目に建設した当時県内一の設備を誇る白亜の近代的病院であった。敷地面積は646坪、二階建てで、床面積は一階291坪、二階177坪、病床数約90床であったという。現在、伊藤病院および隣接していた伊藤家の住居跡地は鳥取市立遷喬小学校および公民館の敷地となっている。伊藤病院が存在したことを示す標識はなく、鳥取市出身の蘭学者で『ハルマ和解』を編纂した稲村三伯の顕彰碑があるのみである。伊藤病院は伊藤隼三博士の長男である伊藤肇博士によって、昭和5年鳥取市に寄付された。市はこれを市立鳥取病院として継続し、昭和14年4月5日には新病院を新築して落成式を行っている。京都大学を退官して伊藤隼三博士が帰郷した際には、「日本一の医者鳥取に帰る」と新聞紙上でも報じられ、県内はもとより遠く島根・兵庫両県からも患者が殺到したそうである。昭和4年5月7日、伊藤博士は自院の病棟回診中に脳貧血で倒れ、上腹部痛と吐血の症状が見られ、輸血等の治療が行われたが効果なく、5月14日に他界した。天皇陛下は勅使として鳥取県知事を御差遣、幣帛を御下賜。葬儀は菩提寺である龍雲山眞宗寺にて挙行。法名は大乗院殿釈聖醫界雄居士。墓は「伊藤隼三夫婦之墓」の墓碑銘で、眞宗寺境内に設置された。現在、同寺は鳥取市元町424番地に移転されている。